

事例2 仙台市教育委員会の事例：中学校に焦点を当てて

仙台自分づくり教育（以下「自分づくり」）は、キャリア教育の仙台版であり、すべての市立学校において実践されている。中でも、仙台市立A中学校（以下「A中」）は市内でいち早く、平成17年度から5日間の職場体験活動に取り組み、学校教育全体において体系的なキャリア教育を推進している。長期的な目標としては、「社会を支える25歳を思い描いて」どんな社会人・職業人になりたいのか、育てたいのか、そのためにはどんな教育の機会が必要であるのかという視点を大切にしている。ここでは、A中の「自分づくり」の評価について、その開発の経緯や評価結果の活用、今後の課題について紹介する。

1. 手作りのキャリア教育

平成17年当時、「自分づくり」の構想はあったものの、市内の先陣を切って取り組んだA中学校の苦労は大きかった。今でこそ、本市独自の手引きや職場体験調整のシステム、費用も整備されたが、当時は何もかもが手作りであり、教職員の苦労は容易に想像できる。一方、職場体験後や事後学習後の生徒の感想は教職員を奮い立たせるようなものであった。「はじめて働くことについて考えた。普段は見えなかった大人の努力を見た。先生たちの一生懸命さが伝わってきた。(男子)」「職場体験から帰宅して、無性に父親と話したくなった。(女子)」

2. 生徒の発達課題の把握

本市では、短期的な目標（キャリア教育で身につけさせたい諸能力）については、生徒や保護者にも理解しやすいように基礎的・汎用的能力を独自の5能力で表している（図4-10）。A中では、生徒の発達課題の把握とこれまでの「自分づくり」の評価を行うにあたり次の資料を活用している。

仙台自分づくり教育で育てたい能力について

起業教育	キャリア教育 4領域8能力	自分づくり教育 旧→新	キャリア教育 基礎的・汎用的 能力
コミ現協ア情 ミ断同イ報 ユ・力しデを ニプてア取集 ケレ実行試し ーゼ力組す分 シテむ企折 ョーリチ画す ンシードム 力力力力力 等ワーク ンワー ンシ ック プ力		みつめる力	自己理解・ 自己管理能力
	人間関係形成能力	かかわる力	人間関係形成・ 社会形成能力
	意思決定能力	うごく力	課題対応能力
	将来設計能力	みとおす力	キャリア プランニング能力
	みとおす力	いかす力	
	いかす力	情報活用能力	

図4-10 自分づくり教育で育てたい能力

- ①仙台市生活・学習状況調査（市一斉 表4-8）
- ②Q-U調査（学校独自）
- ③自分づくりアンケート（市一斉 2年のみ）
- ④多様なポートフォリオ（学校独自）
- ⑤25歳の自分（学校独自ワークシート）
- ⑥学校評価資料（アンケート）

こういった資料をもとに次のような場面で協議を行う。

- ①同一学区の小学校教職員との「自分づくり」検討会（市悉皆と学区独自の複数回）
- ②自分づくり実行委員会（地域住民・諸団体含む）
- ③学校関係者評価委員会
- ④学校評議員会
- ⑤PTA役員会

これらの会議において「自分づくり」の成果や課題を協議し、校内では見ることのできない生徒の発達課題や成長の様子を把握するとともに、「自分づくり」は校内だけではおさまらないものという認識の共有化をねらっている。

表4-8 仙台市生活・学習状況調査項目 抜粋

学校で友達に会うのは楽しい
学校の決まり(規則)を守っている
新しいことを覚えるのは、楽しい
自分の夢をかなえるために、たくさん勉強する
できないことは、何回も練習する
新しいことや、わくわくするようなことを探す
自分が、世の中の役にたてるように、勉強をがんばる
家の手伝いをしている
家での生活について、家の人との約束を守っている
新聞やテレビのニュースなどに、関心がある
人の気持ちがわかる人間になりたいと思う
人の役に立つ人間になりたいと思う
人が困っているときは、進んで助けている
自分には、よいところがあると思う
難しいことでも、失敗をおそれないでチャレンジしている
みんなと意見が違っていても、自分の意見を話す
ものごとを最後までやりとげて、うれしかったことがある
将来の夢や目標をもっている
自分の将来を考えると、楽しい気持ちになる
自分の将来について、家の人と話し合っている
将来の可能性を広げるために、勉強をがんばる
将来どのようなことがらを重視して、自分の仕事を選びたいと思いますか(複数回答)
1. 能力や適性を生かせる
2. 社会的地位や名声
3. 自由な時間が多くある
4. 高い収入が得られる
5. 失業の恐れがない
6. 人のために役立ち貢献できる
7. 興味や好みに合っている

3. 「3年後、10年後を見据えているか」

A中では、初期の段階から、教科・領域横断型の「自分づくり」が実践されてきたが、その取組には、残念ながら学年や年度による濃淡があったことは事実である。これまでの取組の修正にあたっては校長の強いリーダーシップが不可欠であった。「その活動は3年間の発展性を見据えてのことか(校長)」「この取組を10年後の生徒たちにどうつなげたいのか(校長)」「こういった教職員への声かけは、機をとらえ、継続されてきた。

一方で校長は、「先生のあの発問で職業観にグッと迫ったね(校長)」「先生の丹念な指導がこの生徒たちの発達課題の達成に結び付いたね(校長)」といった教職員への賞賛も忘れなかったことを申し添える。

①PRは校長の仕事

文中の会議や学校説明会、PTA総会、町内会などいかなる場面でも「自分づくり」を話題にし、啓発に努めるのは校長の役割であったこと。

②つながりは校長の責任

校内で実践される教育活動が有機的につながっているかは、全体を見渡せる立場が主導、点検すべきであり、A中では校長が担ってきたこと。これには、小学校との連携も含まれ、「連携カリキュラム作成」や情報交換には校長同士が率先した。

③つながりの鍵はひと

「自分づくり」の核になる教員は、原則3年間持ち上がらせたこと。この方針によって、A中では入学時に卒業時(3年後)や10年後を思い描いたカリキュラムデザインを作ることができ、教員の意欲や責任感が向上した。

4. 今後の課題

「自分づくり」を手立てに校内研究を進め、研究公開を重ねるなど、本市のそれをリードするA中では、新たな取組をはじめている。平成17年度に本市ではじめて本格的にキャリア教育に取り組んだ卒業生が18歳になった。そこで、高校卒業後に義務教育時代のキャリア教育について振り返り、中学卒業後への影響について回答を求めた。今後、20歳、25歳と追跡調査を計画していくが、この評価結果概要(図4-11)をもって、この紹介を終える。

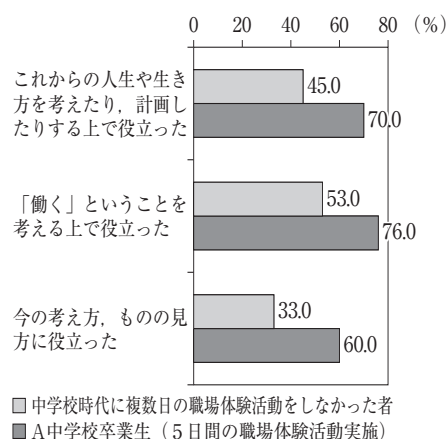


図4-11 仙台自分づくり教育追跡調査 「自分づくり教育が中学校卒業後の私に与えた影響・18歳時」(平成22年・仙台市教育委員会)